



大阪地下河川若江立杭と鴻池新田会所跡見学報告

<寝屋川水系：第2寝屋川、鴻池水路、玉簾井路川、六郷井路川、寝屋川>

- 1: 日時 平成31年4月25日
2: 集合 近鉄大阪線八戸ノ里 10時

3.参加者 19名

玉川橋で、第2寝屋川に沿って歩き10時20分に寝屋川南部地下河川若江立杭に到着。
3人の職員のかたが待機していて早速説明を受けた後、内部へらせん状の階段を下る。
< 寝屋川流域治水対策と若江立杭 >

#寝屋川治水対策

淀川と大和川に挟まれた流域は、中世まで新開地、深野池などの低湿地帯であった。
1704年に大和川の付け替えが行われ、2つの池は消失したが、上流からの水の流れは寝屋川として残された。
すなわち寝屋川流域の大部分は低平地であり、さらに急激な都市化により保水、遊水機能が低下しているため、約3/4は雨水が自然に河川に流れ込まない“内水域”になっており、下水道で雨水を集めポンプで強制的に河川に排水している。ところがこうして河川に集められた雨水の出口は、寝屋川の京橋口の一か所だけ！。そのため出口でのピーク流量を設定し、治水施設による対策（ハード面）と流域における対策（ソフト面）を持って対応する方針がとられている。治水施設は次の4施設群で分担し対策がなされている。



①河道改修：堤防の嵩上げ、河床の掘り下げ等

②放流施設：分水路—寝屋川導水路、城北川（洪水を淀川にながす）

地下河川—市街化の進展した地域では、河川の拡張や、あらたな河川の開削は困難なため、公共施設の地下空間を有効に利用し、新たな放流施設である地下河川を建設する。現在大阪府では、寝屋川北部と寝屋川南部の2本の地下河川の工事を進めている。

③貯留施設：遊水地—洪水を計画的に一時貯留することで下流河川の負担を軽減。平常時はオープンスペースとして公園などとして利用される。

流域調節池—さらに流域調節池も雨水の一時貯留として、公園などの地下空間に建設

④流域対応施設：雨水流出抑制施設（貯留・浸透等）—小学校の校庭なども大雨時には貯留地として利用

#若江立杭：寝屋川南部地下河川の南側の起点。

ここから巨大なトンネルが11.2km先まで伸びていて、完成すれば13.4kmで木津川につながり、大阪湾へと注ぐ。直径は6.9m、深さは約24m。現在トンネルが完成していないので、大雨時の貯水池として利用されるが、貯水量は63万立方メートル、25mプールの1750杯分に当たる。普段は無人で、遠隔管理されている。トンネル内で、持参していただいたライトの下、集合写真を取り立杭見学を終え八戸ノ里駅にもどり、全員で昼食後12時50分の路線バスの搭へ？



13 時 45 分に鴻池新田会所跡に到着。
学芸員からの説明を受ける。

#鴻池新田会所跡：1704 年に治水の名のもとに大和川付け替え工事が行われ、河内平野では新田が多数開発された。このうち鴻池新田は約 200 町歩約 1/6 を占めていた。会所は鴻池家による新田経営の拠点であり、本郷から派遣された支配人のもとに、小作農民からの年貢、肥料代の徴収、道路、水路、家屋の維持、管理、宗門改帳、争いの裁定などを行った。新田では、綿が主な産物でそのため近隣の農家より豊かで、年貢も米ではなく貨幣で支払われていたそうである。同時代に開発された新田の経営者は次々と変わるなか、鴻池新田は約 240 年間経営者が変わることなく続いた。その後何回かの危機を乗り越え、最終昭和の農地改革で地主としての地位は消失したものの現在のビッグバンクとして継承されていることは驚きである。1980 年には本屋、屋敷蔵などの建物と、御札、棟札が重要文化財に指定された。



3 時に会所跡を出発し、鴻池水路、人工のせせらぎが美しい四季彩々通り、五箇井路川、六郷井路川沿いを経由して、徳庵橋で2つの井路と寝屋川合流点を確認し、さらに寝屋川に注ぐ古川も観察し、4 時半 J R 徳庵駅で解散。



いろいろ対策はとられているが、近年のゲリラ豪雨には対応できないのでは？ さらに結局ポンプでくみ上げる必要があり、電源喪失の事態が起れば、、、等考えさせられた。